

健康とその戦略

■コロナ禍、勝負の3年目■

～ 8 ～



石井 正三氏

原発、歴史的な大災害

2万人の命は一生背負う

年末年始となると、日本の街角の風景がにぎやかになってくる。引き続きのコロナ禍の中でも、庶民の願いは昔も今も健康で長生きすること。インフルエンザの予防接種を済ませると、年末からコロナワクチン三回目接種が始まる。コロナ禍は足掛け三年位と、これまでの歴史から予想していたが、新年は勝負の三年目に入る。

この時期の日本にいと、クリスマスはキリスト教の宗教行事、上皇陛下のお誕生日を寿ぎ、除夜の鐘は仏教行事、元日からは神社参拝で神道行事、成人式は行政の行事だが若い人たちの和服が華やく。多くの日本人が当たり前のように過ごすこのプロセスが、世界の多くの一神教の国では不思議というか理解不能なこと、宗教を否定する教

義を持つ国でも同様だ。

これらは総じて八百万の神を奉じる日本の神道が生活慣習にまで浸透していて、最早、宗教的な深い意味よりも祈りのイベントを利用した商店街の販売促進戦略に影響しているのとみるのが妥当なだろう。

インドのヒンズー教も代表的な多神教で、人口の数くらいい神様がいるとも言われるので、神様の世界は日本以上にぎやかさだろう。

そのヒンズー教徒は牛を食べず、イスラム教徒はハラールフードと呼ばれる法に則って処理された食肉だけを食べるが豚は食わず、中国系の人々は豚肉を好み、ユダヤ教徒はコーシヤルフードではないエビ・カニなどを食べない。アジア大洋州から東洋の文化圏で医師会メンバーの会合をすると、これらの共通項を

事前にすり合わせるのは非常に重要な事項になるし、まして世界医師会の一堂に会しての食事会では一層神経を使う。多くの場合、肉なら羊、魚ならウロコのあるものを選ぶのが無難な選択だ。

そんな中では、互いにご法度のお話をぶつけると友好の場であられなくなるので、宗教絡みの話題はお互いの立場を尊重することが鉄則なのだ。

靖国参拝、妙に過敏

例えば靖国神社参拝について他国が政治的な指図をすること自体、儀礼を欠いた態度とされるのが国際常識なはずなのだが、妙に過敏な日本のマスコミの姿勢が常識からの逸脱を招いているように見える。

その一方で、年末年始の一カ月程度の間にくつもの宗教的年中行事を平然とこなしている日本の庶民の様子を、宗教的対立で激しい争いに発展している多くの地域の当事者同士に、お見せしてみたいとの思いが湧いてくる。

神無月と呼ばれる十月に、全国にただ一カ所、八百万の神々が集まるので神在月と称される出雲大社では、住民一同が細やかな心配りで神々をお迎えして、送り出すまで静かに過ごすと同った。不要な対立を避ける古来の叡智なのだろう。

育った我が家の仏壇の上には神棚があり、子どもの頃通ったのは、小名浜のカトリック系百合幼稚園だった。今の家でも親の位牌は仏壇に、お札は神棚にお祀りしているから、私の幼児体験そのものが日本的な混淆状態だったのかもしれない。

卒園してからキリスト教に改宗したわけではないが、その一年を通じたスケジュール感を体験したことは、日本医師会で国際担当となったときにも役立ったし、クラシック音楽を楽しむときには大いに助けになった。西欧の大作作曲家たちは宗教音楽にも多くの傑作を送り出しているからだ。

そういえば、幼稚園でクリスマスに短い劇をやり、私は東方の三博士の一人に

なつたことがある。空の西の方を指さして「あの星の下にイエスさまがお生まれになつた」というセリフを言うのだが、医師になつて博士号も頂戴したのだから、改宗はしなかつたものの、イエズス会の配役は完全には外していな

かつたのかもしれない。このエピソードを欧米の方々に持ち出すと、いつぺんに座が和やかになるので何度か使わせてもらった。

アメリカンポップスでも多くの歌手たちが教会でゴスペルなどを楽しむ若い時期を経



宗教の自由などもあつて、近年は「冬の風物詩」になつた、七色に輝くイルミネーションの光を楽しみながら、除夜の鐘を突き、神社への参拝も「平の通称・三十メートル大通り」

いわき、世界の人々にも 良い年になるよう願う 支援チーム創設、活動達成

て、やがて大きなヒット作を送り出している。

ビング・クロスビーやフランク・シナトラ、それにエルヴィス・プレスリーだつてクリスマスソングに名唱を残してる。マライア・キャリーもそう。日本でも私が大ファンを自認してる竹内まりやのパートナー、山下達郎に名曲名唱がある。

翻訳物の外国文学も随分読んだが、日本の古典では古事

記が若い時からの愛読書、その他にも万葉集から古今・新古今和歌集や大鏡・増鏡に今昔物語などなど、無味乾燥な医学書の合間に結構親しんだ。

芸術的にも大損失

明治維新以来、神仏習合は原則分離されて、貴重な仏像が浮世絵とともに海外流出を招いた。芸術的な価値からだけみても、今となつては大きな損失だつたと欧米の美術館でのコレクションを観ると感じるが、消滅の危機にあつたモノたちが大事に保存されている状況には感謝するしかない。

さて、東日本大震災は大変だつたし、同時発生した原発事故は世界の関心も引く歴史的な大災害。「その福島県いわき市に今も住んでいる。原発からはそうだな五十キロちよつと位か」というと、なぜ生きているのだらうかと訝るような視線には何度も逢つた。

日本医師会災害支援チーム J M A T を創設して初め

ての支援活動を達成できたこと。その半面、震災に関連して救えなかつた二万人の命の重さは一生背負つていく。いろんな思いもあるが、それらをきつかけに学ぶことが増えたのは、ありがたい。「Ancora Imparo 私はまだ学んでいる」と言つたのはミケランジェロ。

二〇二二年は、いわきにとつても、世界の人々にとつても、良い年になることを願つてやまない。

筆者プロフィール

石井 正三

(いしい・まさみ)

地域医療連携推進法人医療戦略研究所所長・代表理事、長崎大学客員教授、ハートド公衆衛生大学院名誉武見フェロー、東日本国際大学健康社会戦略研究所所長・客員教授、医療法人社団正風会理事長

